

農学系大学生と新聞記事にみる七草に関する認知度

崔 至鎔^{1*}・権 孝姫²・松尾 英輔¹

¹九州大学大学院農学研究院 812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

²九州大学大学院生物資源環境科学府 812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

The Knowledge of Undergraduate Students of Agricultural Universities and Frequency of News Items in Main Newspapers on "Nanakusa" (Seven Spring Herbs and Seven Autumn Flowers) in Japan

Jiyong CHOI^{1*}, Hyojung KWEON² and Eisuke MATSUO¹

¹ Faculty of Agriculture, Kyushu University, Fukuoka 812-8581, Japan

² Laboratory of Applied Plant Science, Graduate School of Agriculture, Kyushu University, Fukuoka 812-8581, Japan

(*Corresponding author)

Summary

This report targets undergraduate students majoring in agriculture and newspapers, and deals with the knowledge of seven spring herbs and seven autumn flowers, which are traditional event plants in Japan. The average percentage of knowledge of the seven spring herbs and seven autumn flowers was 2.9 by female students, 0.5 by male students. There was no difference between students with a rural or an urban background. Students wrote the common name of seven spring herbs in the same order with seri (*Oenanthe stolonifera*), nazuna (*Capsella bursa-pastoris*), ogyo or gogyo (*Gnaphalium affine*), hakobera (*Stellaria media*), hotokenoza (*Lapsana apogonoides*), suzuna (*Brassica rapa*), and suzushiro (*Raphanus sativus*), and in pairs such as seri-nazuna, ogyo-hakobera, and suzuna-suzushiro. No such phenomenon was observed in the seven autumn flowers. Frequency of news item about seven spring herbs and seven autumn flowers in the main newspapers for a period of twenty years was 710 and 102, respectively. Mostly, seven spring herbs were written in the same order in both the newspapers and by the students.

Key Words: seven spring herbs, seven autumn flowers, agricultural student, newspaper

はじめに

「秋の七草」はハギ(萩), オバナ(尾花), クズ(葛), ナデシコ(撫子), オミナエシ(女郎花), アサガオ(朝顔) (一説ではキキョウ(桔梗)), フジバカマ(藤袴)の七種類で、今から1,200年以上も前の奈良時代に『万葉集』で山上憶良が詠んだもので(万葉集巻第八1538), その鑑賞は日本の風流として長い間続いてきた。その後、平安時代に、正月の7日に七草がゆとして供される「春の七草」(一名「食べる七草」ともいわれる)が始まり、無病息災を祈るこの習俗は現在でも年中行事の一つになっている(斎藤ら, 1992; 青木, 1999)。春の七草は、鎌倉時代の『河海抄』にセリ(芹)・ナズナ(薺)・オギョウ(御行)・ハコベラ(繁縷)・ホトケノザ(仏の座)・スズナ(菘)・スズシロ(蘿蔔)があげられている(斎藤, 1977)。おそらくは、山上憶良の秋の七草に対比させる意識が働いていたので

あろう。

このように七草は、人間・植物関係のなかでも、日本人の暮らしの一部として長く、広く親しまれていたものであるが、最近ではなじみの薄いものになりつつある。一方、ことさらにマスメディアの話題とされる傾向も認められる。

本研究は、大学生がこれらの七草をどの程度知っているか、その記憶の仕方に特徴があるか、それがマスメディアでの話題と関係しているかどうかを探ろうとするものである。

調査方法とまとめ

本調査では、1982年から2001年まで、1,373名(男性860名, 女性513名)の農学系大学生(主として鹿児島大学農学部, 九州大学農学部, 南九州大学園芸学部)を対象に、春と秋それぞれに1から7までの番号をつけた回答用紙を配布し、春と秋の七草を知っているだけ自由に記述してもらった。それらの結果を取りまとめ、調査

2002年11月15日受付。2003年2月3日受理。

本報は人間・植物関係学会2002年大会(九州大学)において発表した。

年度の早晚, 育った場所(都市・農村・山村・漁村), 性別と関係があるかどうかを探った. この際, 古名や異名が記述されたものは正解とみなした. たとえば, 春の七草ではベンベンガサ(ナズナ), ハハコグサ・ゴギョウ(オギョウ), カブ(スズナ), ダイコン(スズシロ)であり, 秋の七草ではススキ(オバナ)である. また, 秋の七草についてはアサガオではなくキキョウだとする説もあり, 両者とも正解とみなした.

一方, 七草に関する新聞記事を日本経済新聞社の「日経テレコン21」を用いて朝日新聞, 産経新聞, 日本経済新聞, 毎日新聞, 読売新聞の5大新聞を対象に1983年から2001年まで検索した. ただし, 産経新聞では1988年以降しか入力されていなかった. 検索した記事をもとに, 掲載時期や頻度, 記述の特徴を調べ, 七草に関する学生の記述と比較検討した.

結果および考察

1) 大学生が記述した七草

全体的に秋の七草より春の七草のほうがよく知られていた (Fig. 1). 回答者たち (農学系大学生) が記述した春の七草は男女の平均で約3種類, 秋の七草は1種類を下回った.

植物には比較的関心をもっていると考えられる農学部の, しかも農学系 (園芸系を含む) 学生が記述する七草の数は意外に少なかった. 理系の他学部生や文科系学生の関心との比較は今後の課題として興味深い.

調査年数が約20年にわたっているので, 初期と後期とでは記述数に違いがでることも考えられる. そこで, 初期 (1982~1988) と後期 (1995~2001) のそれぞれ7年間を比較してみたが, ほとんど差は認められなかった (データ省略).

男性と女性とを比べると, 女性のほうが多く知っていた (Fig. 1). 七草をまったく記述できない回答者の割合は, 春の七草では男性38.0%, 女性12.5%, 秋の七草では男性81.0%, 女性71.2%と, いずれの七草もまったくわからない回答者は男性に多かった. これは植物に対す

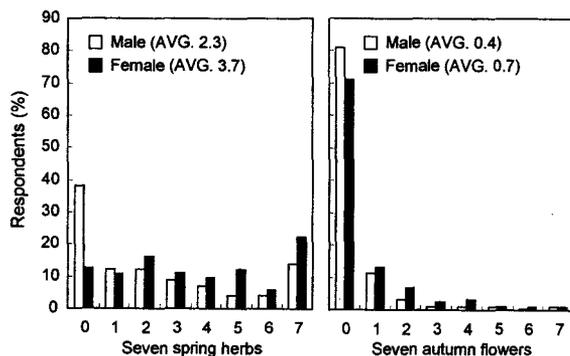


Fig. 1. Number of seven spring herbs and autumn flowers written by male and female students.

る女性の関心が一般的に高いことを反映しているものとみられる. というのは, 1) レジャー白書'98 (余暇開発センター, 1998) によると「園芸, 庭いじり」ブームも女性参加者が主役であり (「園芸, 庭いじり」に女性は39.7%参加しているに対して男性は31.9%である.), 2) 農学系学生のアンケートでも, 園芸経験者は男性より女性のほうが多い (松尾, 1994) し, 3) また, 女性の場合は家で七草がゆを作るとき手伝ったことがあると考えられるからである.

農村などの非都市で育った人は植物にふれる機会も多く, 七草をよく知っているのではないかと考えられる. そこで, 育った場所を都市と非都市 (農・山・漁村) にわけて, 七草の記述数をみたが, 春と秋の両方とも育った場所による差はなかった (Fig. 2). また, 春の七草の7種類をすべて記述した回答者をもみても, 都市で育った人が16.1%, 非都市のそれは16.2%とほぼ同じであった. すなわち, 予想したような都市部よりも非都市部のほうが七草をよく知っているというような傾向はみられなかった.

七草の種類別に記述された割合をみると, 春の七草ではナズナが64.0%と最も高く, 続いてセリ50.5%, ハコベラ43.6%, スズシロ36.6%, ホトケノザ34.7%, ゴギョウ27.9%であった. 一方, 秋の七草では正しい記述の割合が最も高かったのはオバナ (ススキ) で16.6%, 続いてキキョウ9.6%, ハギ7.4%, オミナエシ6.9%, 以下クズ, フジバカマ, ナデシコで, それらは5%未満であった. 秋の七草では, 春の七草に比べて正しく記述した回答者は著しく少なかった (Table 1).

七草以外で, 春の七草として記述された七草以外の植物は141種類であったが, いずれもその割合は全回答者の10%以下であった. それらの例を多いほうからあげると, 10人以上が記述した植物はヨモギ(98人), ナノハナ(47人), タンポポ(40人), ツクシ(33人), シュンギク(27人), ゼンマイ(23人), オオバコ(19人), ミツバ(19人), レンギョウ(14人), サクラ(12人)であった. また秋の七草では110種類が記述されていたが, 割合はきわめて低

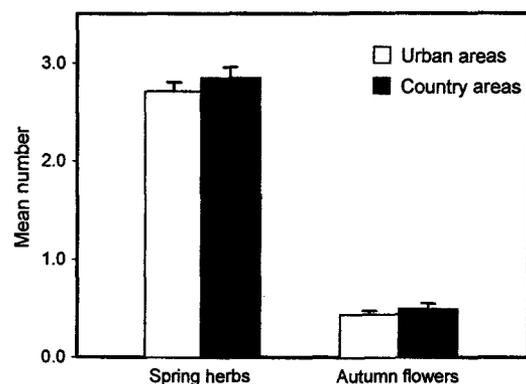


Fig. 2. Number of seven spring herbs and autumn flowers written by respondents grown up in urban areas or country areas. Bar means SE.

Table 1. Percent respondents who correctly wrote the names of seven spring herbs and seven autumn flowers.

Seven spring herbs	%	Seven autumn flowers	%
<i>Oenanthe javanica</i> (Blume) DC. (セリ; seri)	50.5	<i>Lespedeza bicolor</i> Turcz. (ハギ; hagi)	7.4
<i>Capsella bursa-pastoris</i> (L.) Medik. (ナズナ; nazuna)	64.0	<i>Miscanthus sinensis</i> Anderss. (ススキ; susuki)	16.6
<i>Gnaphalium affine</i> D.Don (オギヨウ; ogyo)	27.9	<i>Pueraria lobata</i> (Willd.) Ohwi (クズ; kuzu)	4.0
<i>Stellaria neglecta</i> Weihe (ハコベラ; hakobera)	43.6	<i>Dianthus superbus</i> L. (ナadeshiko)	2.6
<i>Lapsana apogonoides</i> Maxim. (ホトケノザ; hotokenoza)	34.7	<i>Patrinia scabiosaefolia</i> Fisch. Ex Trevir. (オミナエシ; ominaeshi)	6.8
<i>Brassica rapa</i> L. (スズナ; suzuna)	30.2	<i>Eupatorium japonicum</i> Thunb. ex Murray (フジバカマ; fujibakama)	2.8
<i>Raphanus sativus</i> L. (スズシロ; suzushiro)	36.6	<i>Platycodon grandiflorum</i> (Jacq.) A.DC. (キキョウ; kikyoo)	9.6

Makino, T. 1996. Revised Makino's Illustrated Flora in Colour, Gamopetalae and Choripetalae. Hokuryukan Co., LTD, Tokyo.

Makino, T. 2001. Revised Makino's Illustrated Flora in Colour, Choripetalae and Monocots. Hokuryukan Co., LTD, Tokyo.

Table 2. Characteristics of written order of seven spring herbs by respondents.

Seven spring herbs	No. ^z	Written order by respondents (%)						
		1st	2nd	3rd	4th	5th	6th	7th
<i>Oenanthe stolonifera</i> (セリ; seri)	694	59.5	13.3	9.7	8.1	3.2	4.9	1.4
<i>Capsella bursa-pastoris</i> (ナズナ; nazuna)	879	32.2	49.6	5.0	4.9	2.5	2.8	3.0
<i>Gnaphalium affine</i> (オギヨウ; ogyo)	383	15.9	4.4	49.9	8.9	10.4	8.6	1.8
<i>Stellaria media</i> (ハコベラ; hakobera)	599	8.3	20.7	20.5	35.2	5.5	4.7	5.0
<i>Lapsana apogonoides</i> (ホトケノザ; hotokenoza)	477	4.2	5.9	19.5	12.2	45.9	6.1	6.3
<i>Brassica rapa</i> (スズナ; suzuna)	414	16.4	7.2	20.0	12.1	6.3	36.5	1.4
<i>Raphanus sativus</i> (スズシロ; suzushiro)	502	3.8	18.1	10.4	17.3	12.2	5.6	32.7

^z Total numbers of correctly written plants by respondents.

Table 3. Characteristics of place and pair of seven spring herbs written by respondents.

Pair of species ^z	N	Written place of seven spring herbs by respondents (%)						
		1 st /2 nd	2 nd /3 rd	3 rd /4 th	4 th /5 th	5 th /6 th	6 th /7 th	Total
セリ・ナズナ (seri・nazuna)	630	58.3	1.4	3.7	2.2	1.1	3.5	70.2
ゴギョウ・ハコベラ (gogyo・hakobera)	344	14.5	1.5	47.4	2.6	4.9	7.0	77.9
スズナ・スズシロ (suzuna・suzushiro)	336	14.3	3.3	16.7	10.4	4.5	42.6	91.7

^z セリ: *Oenanthe stolonifera*,
ゴギョウ: *Gnaphalium affine*,
スズナ: *Brassica rapa*,

ナズナ: *Capsella bursa-pastoris*,
ハコベラ: *Stellaria media*,
スズシロ: *Raphanus sativus*.

く、10人以上が記述していたのはコスモス(27人)、ヨモギ(17人)、キク(14人)だけであった。これらの植物は、七草を知らない人がその季節によく見られる植物をあてずっぽうに書いたものと考えられる。

ところで、花の好みは時代とともに変わる。1935年に七人の文化人が一つずつ選んだ秋の七草は、コスモス(菊池寛)、オシロイバナ(与謝野晶子)、ヒガンバナ(斎藤茂吉)、シュウカイドウ(辻永)、アカマンマ(イヌタデ)(高浜虚子)、ハゲイトウ(長谷川時雨)、キク(牧野富太郎)であった(朝日新聞, 2000)。最近のように、とくに観賞用の植物が多様化し、多くの花が花壇用, 切花用, 鉢花用として出回り、花の好みも変化した現在では、古来の秋の七草がどのような意味をもつか再検討の余地がある。

とくに興味深いのは、春の七草の場合、記述順序に一定の傾向がみられたことである。すなわち、まず一つは、書かれた割合がもっとも高かった順番を植物ごとにみると、セリは1番目、以下ナズナは2番目、ゴギョウは3番目、ハコベラは4番目、ホトケノザは5番目、スズナは6番目、スズシロは7番目となっていたことである(Table 2)。これは、7種類の植物が前述のような一定の順序で記憶されていることを示唆する。

次に、前述の事実と関係していると考えられるのであるが、「セリ/ナズナ」、「ゴギョウ/ハコベラ」、「スズナ/スズシロ」のように二つずつ組み合わせてこの順序で記述されていたことである(Table 3)。すなわち、「セリ/ナズナ」の組み合わせた記述は70.2%であるが、そのなかで58.3%が1・2番目に書かれていた。「ゴギョウ/ハコベラ」の組み合わせは77.9%で、そのなかで47.4%が3・4番目に書かれていた。「スズナ/スズシロ」の組み合わせは91.7%で、そのなかで42.6%が6・7番目に書かれていた。これには5番目が欠けているが、前述の5番目にもっとも多く記述されていたホトケノザを入れてみると、「セリ/ナズナ」、「ゴギョウ/ハコベラ」、「ホトケノザ」、「スズナ/スズシロ」という順序で記憶されていることになる。つまり、音数で5-7-5-7と七草の名前が続き、最後に7音の「春の七草」をつけると、短歌のリズムで七草をすべていえることになる。これは日本人にはなじみ深く、覚えやすいリズムである。

2) 新聞記事にみる七草

一方、1983年から2001年まで19年間の新聞の七草の記事を調べたところ、「七草」のキーワードで1,063件が検索された。そのなかで、春の七草に関する記事は710件であり、秋の七草のそれは102件、春と秋の両方についてふれた記事は15件と、秋の七草より春の七草の記事が圧倒的に多かった(Fig. 3)。その他236件の記事は春と秋の七草について直接ふれたものではなかった。

春の七草に関する記事は主に正月7日前後(1月5~9

日)に集中し、その割合は全記事の53.0%であった(Fig. 3)。また、ここ数年間春の七草の記事が著しく増えている(Fig. 4)。

これらの背景には、まず一つには、七草がゆがもともと健康回復を祈願したものであったことから、七草がゆを節季行事の一つとして意識的に取りあげ、食生活を通して健康への関心を高めるねらいがあるものとみられる。

次に、ガーデニングブームとの関連性も考えられる。すなわち、ガーデニングブームを反映して雑誌や出版物が1994年から急増し(高橋・下村, 2001)、これと並行して七草の記事が増加している事実は(Fig. 4)、ガーデニングのなかで、このような伝統的行事への関心が高まってきたことを意味するのかもしれない。それを通して春の七草への関心が高まったことが考えられる。

春の七草7種類がすべて掲載された記事131件のうち、101件が上述の順序(セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ)で記述されていた。その他の記事にも「セリ/ナズナ」、「ゴギョウ/ハコベラ

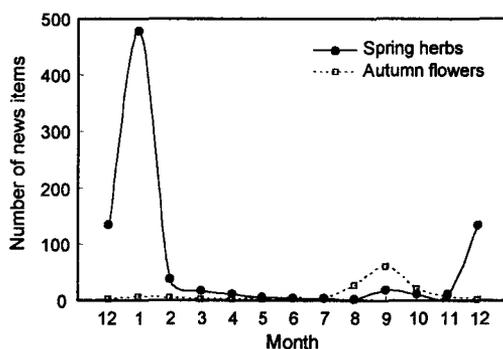


Fig. 3. Changes in the news items about seven spring herbs and autumn flowers per month in the five great newspapers (Asahi Shimbun, The Mainichi Newspapers, The Sankei Shimbun, Nihon Keizai Shimbun and The Yomiuri Shimbun, 1983~2001).

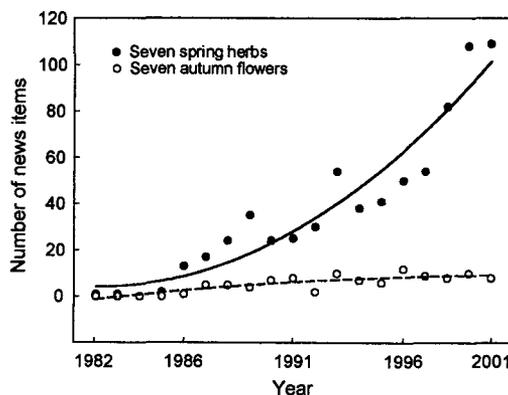


Fig. 4. Changes in the news items about seven spring herbs and autumn flowers in the five great newspapers from 1983 to 2001.

ラ]、「スズナ/スズシロ」の組み合わせの形で掲載されていた。これらは、学生による記述でみられた事実とほぼ同じ傾向であった。

他方、秋の七草を記載した記事は44件あったが、春の七草のように記述順序に目立った特徴はみられなかった。

新聞記事に記載された頻度は、春の七草の場合、ナズナ(348件, 32.7%)・セリ(303件, 28.5%)がもっとも多く、ゴギョウ(202件, 19.0%)・ハコベラ(184件, 17.3%)・ホトケノザ(161件, 15.1%)・スズナ(174件, 16.4%)・スズシロ(190件, 17.9%)など、かなり差がみられた。

秋の七草の場合、ハギ(76件, 7.1%)・オバナ(64件, 6.0%)・クズ(55件, 5.2%)・ナデシコ(65件, 6.1%)・オミナエシ(67件, 6.3%)・フジバカマ(53件, 5.0%)・キキョウ(58件, 5.5%)とその記載頻度はほぼ同じであった。

とくに、ナズナやセリの頻度が高い理由として、まず一つには、七草の冒頭に位置づけられることが定着していること、次に、昔から伝わる歌「七草なずな、唐土の鳥が日本の土地にへ渡らぬ先に」が取りあげられた例(45件)が多く、七草をすべて挙げているのではないことなどが考えられる。

以上のように、学生の場合にも、新聞記事の場合にも、秋の七草より春の七草がよく記述されている理由には、まず、春の七草は七草がゆの行事として行われ、おかゆを食べること、正月7日の七草がゆの日前後に新聞や放送などのマスメディアで紹介されるので、見聞する機会が多いことがあげられよう。これに対して、秋の七草のほうは万葉集時代から知られた日本的な花でありながら、現代の若者やマスコミには興味をもたれなくなっていることを示すものであろう。

春の七草の記述順序に一定の傾向がみられる理由には、それらが日本古来の五七調のリズムをもっていて覚えやすく、新聞などに記載されていて見聞する機会が多いことなどが考えられよう。しかしながら回答者が七草の名をこれらのマスメディアから直接学んだものか、それとも家庭や学校などで学んだものかについては、以上の資料では明確ではないので、方法をあらためて探ることにしたい。

摘要

農学系学部生(男性860名, 女性513名)が記述した七草は、春の七草では平均3種、秋の七草では平均1種類以下であり、男女別にみると、男性よりも女性の記述数が多かった。

都市出身者と非都市出身者では、春の七草でも秋の七草でも記述数の差は認められなかった。春の七草で50%以上の回答者が記述したのはナズナ(64%)とセリ(50.5%)のみであった。秋の七草ではもっとも記述者が多かったのはオバナ(ススキ)の16.6%で、その他は10%以下であった。春の七草では「セリ・ナズナ」・「ゴギョウ・ハコベラ」・ホトケノザ・「スズナ・スズシロ」という記述順序がみられ、5-7-5-7-7の短歌のリズムにあわせて覚えていることが明らかになった。しかし、秋の七草については記述率が低だけでなく、順序も一定ではなかった。新聞にみる七草の記載は春のそれが圧倒的に多く、しかも正月7日前後に集中していた。また、春の七草の記述順序が学生のそれと同じものが多く、春の七草を覚えるうえで何らかの関連を有することが示唆された。

引用文献

- 青木純子. 1999. 秋の七草, 江戸時代の園芸文化を探る (2). グリーン・エージ 30:37-41.
- 朝日新聞. 2000.9.8. 秋の七草 平沼洋司 (空の色 風の音).
- 斎藤正二. 1977. 花の思想史. pp.85-93. ぎょうせい. 東京.
- 斎藤 隆・大川 清・白石眞一・茶珍和雄. 1992. 園芸学概論. pp.1-2. 文永堂出版. 東京.
- 桜井 満. 1976. 秋の七種の花—万葉植物民俗記—. 植物と文化 17:26-38.
- 高橋ちがさ・下村 孝. 2001. ガーデニングブームの実態と背景—雑誌, 出版物を通して見たガーデニングブーム—. ランドスケープ研究 65:27-32.
- 松尾英輔. 1994. 大学農学部学生にみる園芸経験と園芸の好み—農芸教育を考えるために. 日本農業教育学会誌 25(1): 31-42.
- 余暇開発センター. 1998. レジャー白書'98.